安部公房

飢餓同盟

講談社

飢餓同盟

安部公房

講談社

飢餓同盟

昭和四十五年五月二十五日　第一刷発行

著　者　安部公房
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　郵便番号・一一二
電話・東京(九四二)一一一一(大代表)／振替・東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
定　価　五〇〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
© Kobo Abe 1970 Printed in Japan

0093-124063-2253 (0)

飢餓同盟

装幀　横山　明

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

第一章

1

花園という地名はほうぼうにある。M県だけでも三つある。だから手紙をだすときは、郡、大字、字、と、できるだけ詳しく書かなければ届かない。しかしいまは手紙をだすわけではないのだし、それにある先生に言わせれば、物語というものは作者が本当だと言いはるほどウソにみえ、ウソだと言いはるほど本当にみえるものだそうであるから、なおさらアイマイなままにしておくほうがいいようにも思う。でも、昔の花園温泉だといえば、四十すぎた人ならおぼえているだろうか？　いまはただの花園町だ。二十年ほどまえに大地震があって、それ以来温

泉はとまってしまった。一日一日とさびれていく、老いぼれた普通の町になってしまった。花園という名があたえる印象など、もうどこを探してもありはしない。ただ、花いじりの好きな駅長がいて、構内にきれいな花壇をつくって表彰されたことがある。もう一つ、花園キャラメルという、箱に一匹の蜜蜂と菊の花をちらした、キャラメルの製造元があって、赤と緑のハチマキをした高い煙突が、やっと地名の印象を支えているくらいのものである。

ある雪のふる夜だった。その日は朝から雪がふりつづいていた。最初にマサぶきの屋根の上で秋がおわった。次にワラ屋根の上の秋が追いはらわれ、最後にトタン屋根の上で死んだ。自転車にのっていたものが降りておしはじめると、短靴をはいていたものはゴム長にはきかえ、庭の畠に野菜をいけてあったものはあわててその上に目じるしの竿をたてた。馬にひかせた最初の除雪橇が子供たちにとりかこまれて大通りを通りすぎると、そのあとにはもう融けない冬がきた。

二十三時五分。最終下り準急列車。

ゴム引きの合羽を着た若い駅員が一人、せかせかした足取で、降りつもったプラットホームを往き来していた。風はやみ、すべてが妙にひっそりと、耳をふさがれたまま天にのぼっているような感じである。六分もおくれていることだし、乗り降りの客もなさそうなので、駅員は発車合図のランプをあげようとした。ちょうど、そのとき、彼が立っていたすぐわきの昇降口

から、呼びとめられたのである。――ここは、花園じゃありませんか？

駅員は駅名をよぶのを忘れていたことを思い出し、いやな気がした。しかし、その昇降口の男は、べつに咎める気はないらしく、雪で立札がみえないのです、とかえってすまなそうにほほえんでいる。駅員は上目づかいに見てためらった。ためらうわけがあった。ここ二三日、町会議員の補欠選挙の工作にS市から大物が乗込んでくる可能性があり、誰がどんな具合にしてくるか分らないというので、花井太助から厳重な見張を言いつかっていたのである。花井太助はキャラメル工場の主任であり、ひもじい同盟、後に飢餓同盟の有力な指導者の一人だ。この駅員がうけた役目もこの同盟の指令なのである。彼は昇降口の男を、見なれない男だと思い、不安になって、生真面目とも無愛想ともとれるあいまいな態度でうなずき、ここで切符をいただいておきます、と、わざと聞きとりにくいふくみ声で答えた。男が不器用にとびおりるとその靴の下で雪がきしんで、同時に汽車が動きだした。男はやはりほほえんでいた。

「いいニオイですね。」と男が言った。すこし舌がもつれていた。

「え？」駅員はおどろいて聞きかえした。

「雪のニオイです。」と相手はふかく息をすいこみ、犬小屋ほどもあるトランクを持上げながら誰に言うともなしに言った。「きれいだ、二十年前とそっくりだ。」

男は黒いソフトをかぶり、黒い背広を着て、ほら穴のような感じだった。そのうえにみるみ

る雪がつもり、すこしちぢまったように見えた。重そうにトランクをかつぎあげると、つもった雪をかきまぜるような足どりで、のろのろ立去っていった。駅員は疑わしげに、しばらく黙ってつっ立っている。……いったいあれが本当にS市の大物なのだろうか？　首をかしげ……男が雪の中に吸い取られていくのを見送ってから、妙に沈んだ気持で詰所にもどった。

今夜は彼が夜勤の当番である。残業の連中が膜をかぶったような表情で帰り仕度をしていた。彼はストーブに薪を一本ほうりこんで、破れ目からのぞく焔の渦をみつめながら、いつの間にかぼんやり考えこんでいる。最近、ひもじい同盟の正体がさっぱり分らなくなってしまったように思うのだ。いや、考えてみれば、はじめから分っていたわけではない。一年ほどまえ、花園新聞の記事で知って、月に一度文化ホールで開かれる読書会に出たのが、事のはじまりだった。

彼はもうその集りのことをはっきり思い出すことはできない。むりに思い出そうとすると、車座になった、七、八人が、一方を向いて同時に口をあけている奇妙な姿で浮んでくるだけだ。そしてその中に自分がいたとはどうしても思えない。天井か、壁の穴からでものぞいていたような気がするのだ。床が傾いて見えた。その一番高いところに住職で花園新聞の社長をしている重宗がいた。あとの出席者についてはあまり自信はないのだが、たぶん中学の先生、開業医の藤野の娘、役場の青年、共産党の舵尾、それに花井太助……話の内容については、完全

に忘れてしまった。たがいに会話のやりとりがあっただろうということを、想像するさえむつかしいくらいなのだ。ただなにかしら泣きたいような気持だったことを思いだす。彼がひそかに想いをよせていたむすめが、まだ一度も言葉をかわさぬうちに、東京に働きにいってしまった。彼がそのむすめの切符をきってやった。その切符はブリキのように固かった。ハサミの音が何秒ものあいだ耳の奥でなりつづけた。そのときむすめが「さようなら。」と、三月のはじめに麦畠のあいだを吹きぬけてくる南風のような生ぬるい蒸気をふくんだ声でささやいたように思ったのだ。その瞬間彼は自分の中の詩人を自覚した。しかし文化ホールではそうしたことがすこしも問題にならず、近代的自我の確立という彼の理解からはほど遠い哲学的論議がなされただけだった。彼は一度でこの読書会にこりてしまった。そしてその帰りに花井といっしょだったのである。

とつぜん彼の記憶がはっきりする。

「あいつらは、馬鹿だよ。」……と二人きりになると花井がいきなりそう言った。その一言で彼は花井を、信頼してしまったのだ。信頼したというよりも、この場合、疑惑を解いたといったほうがいいかもしれない。

疑惑……というのは、花井太助についての、妙な噂だった。しっぽが生えているというのである。小さな、腫物ていどのもので、注意して見ないと気づかないくらいだとはいうが、しっ

ぽということになれば、もう大小は問題でないだろう。しかしむろん見たものがあるわけではないらしい。噂が噂をうんで伝説になったというのが正しいのだろう。花井が小学生のころ、どうしても身体検査をうけるのをいやがって、受持の教師に嚙みついたという噂がある。また、彼が決して水泳ぎに行こうとしなかったというのも大きな根拠の一つになっている。しかしそれだって考えようによっては、噂の原因であるというより、結果であったのかもしれないのだ。そのことを口にだして言い、もしそれが花井の耳に入りでもしようものなら、まさに死にもの狂いの報復をうけることを知っていたから、あらためて口にする者もいなかったが、すでに動かしがたい気分にはなっていた。

……その花井の一言が、すっかり感傷的になってしまった、この不幸な駅員の、花井に対するこれまでの印象をまるで本のページでもめくるように変えてしまったというのも、生活から切り離された場所で人間を区別する一切のこころみが、どんな不当なものであるかを日常思い知らされている、彼の境遇を考えてみれば不思議なことではない。――しっぽが生えているなんて、むろんデマさ、と心の中でつぶやいてみた。しかし、仮にしっぽが生えていたところで、べつにかまいはしないじゃないか。彼はこれまでの偏見をわびるために、そのしっぽにさわってみてもいいとさえ思った。赤ん坊の指ほどの、小さなすべすべした突起を想像した。すると彼は花井に対して急にふかい親しみを感じたのだ。その親近感は彼が予測した以上にふか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

かった。――まったく、やつらは馬鹿ですよ……とさばさばした気持で強く合槌をうつと、次の瞬間彼の記憶は工場の守衛室の隣の花井の部屋にとんでいる。部屋の四隅からもうもうと蚊ヤリの煙があがっていた。その煙の中で、ぴょんぴょん跳ねながら日本脳炎――花井は蚊のことをそうよんでいた――を両手の間でうちおとしている花井の姿が目にうかぶ。しかしどうやらこの場面は、季節からおして時間的にずれがあるようだ。あれはたしかに冬だった。どうしてこんなずれがおきたのか、まあ誰の記憶にもありがちのことだから、ことさら追求してみる必要もないだろう。はっきりしていることは、その日、町のボスどもに対する激しい攻撃の熱弁を聞き、ついつられてひもじい同盟に加入させられてしまっていたということだ。花井は言った――これはぼく一人で喋ってるんじゃない。ぼくの口は町民一万二千の口を代表しているんだ。……じっさい花井はよく喋った。彼は形容詞というものの数の多さにあらためて驚嘆させられた。その形容詞の数だけでも町のボスどもは窒息してしまうにちがいない。そのときの花井の顔が、彼にはS市の百貨店のショーウィンドウにかざってある、五色のテープをひらめかした扇風器の印象と重なりあって浮んでくるのだ。これにもまた季節的なずれがある。そう言えば花井にはいつも熱病にかかっているような、汗くさいニオイがまとわりついていたようだ。ずれの原因は案外そんなところにあったのかもしれない。

彼はひもじい同盟の同盟員になった。同盟員になって一年たった。しかし考えてみれば、同

盟について、なにひとつ知っているわけではないのだ。もし人に聞かれたら、なんと答えればいいのだろう？　彼と同盟との間には、点のように花井が存在するだけだ。花井の向うになにがあるのか、想像することもできない。もしかすると、彼が思っているようなものとは、まるでちがったものかもしれないのだ。彼が気にしはじめたのは、つい半月ほどまえ、職場の組織をひろげようと申し入れたのを、花井があっさり断ったことからはじまる。彼は不安になった。同盟はいったい何をしているのだろう？　同盟は果しておれを正式に登録してくれたのだろうか？　花井はずいぶんいろいろなことを喋ったが、具体的なことはなに一つ言わなかった。町政を罵倒しても、町政の分析をしようとはしなかった。革命をしなければならないと言ったが、どうしろとは言わなかった。彼がたずねようとすると、花井はきまって不機嫌な顔をして、――君がじたばたしたってはじまらない、木の実は熟れれば自然に落ちるものだ。時が来れば本部が君の行動を求めるだろう。待つということだって立派な勇気なんだ。組織を信頼するということは強い節操のあらわれだからね、と、そんなことをいう……そうかもしれない。しかし彼はそうした花井の態度から、なぜか子供のあいだだけにしか通用しない、あの残酷な友情が思い出されてならないのだった。年上の悪童が年少の家来たちをつかまえ、東京を見せてやろうと、両耳をもって宙に吊るし上げ、見えたか見えたかと、ミエマシタアリガトウと相手の気に入るように言うまで離そうとしない、あの屈辱的な儀式にどこか似ていはしまい

か。……

「狭山君。」と残業組の一人がカラの弁当箱で彼の肩をたたいて言った。「明日、分会長のところをまわってくるから、あと、たのんだよ。」……うわのそらでうなずき返し、送りだしてから、なにをたのまれたのだろう？　すぐに思い出せないのは、どうせ大したことじゃなさそうだ……そう思ってストーブの中をまた一しきり掻きまわし、もう誰も戻ってきそうにないことを確めてから、電話の呼出しのハンドルをまわした。

2

花井と狭山が電話で、二十三時の準急でやってきた男が何者であるかを、しきりに検討しあっていた、ちょうどそのとき、当の本人はキャラメル工場の前、いま花井がいる守衛室と塀一枚へだてたそのすぐ前の通りを、ふらふらした足どりで歩いていた。

もてあましたらしく、トランクにバンドをかけ、櫂のようにひきずっていた。しかし、しめっぽいぼたん雪は、まるで飯粒のように、ところかまわずベタベタとはりつくので、十メートルごとに立ちどまって、こびりついた雪をかき落さなければならない。……門燈の前で立ちどまった。降りしきる雪の一片一片に反射して、まるでそこに一本の光の柱が立ってでもいるよ

うだ。その内側に、ろくしょうのういた真鍮の標識。――「株式会社花園キャラメル」……男は確めるようにのぞきこんでみて、ほほえんだ。だがここに用事があったのではないらしい。顔をあげて、夢見るように、あたりを見まわす。この、すっぽり雪に埋れた暗闇の中で、いったいなにが見えるというのだろう？

……ふと暗がりの中に人影が現れた。男はぎょっとした仕ぐさで、逃げ出しそうにしたが、相手がパトロールだと分ると、思いなおして足をとめた。パトロールのほうも足をとめた。

「どちらまで？」とパトロールが詰問の調子をおさえ事務的にたずねる。男はほほえみながらうなずいた……が、顔をあげたとき、その微笑は消えて、狼狽の色に変っていた。

「ぼくはいま汽車で着いたばかりです。」と彼はおどおど、歌うような調子でいった。「二十年ぶりに、この町に帰ってきたのです。」

「うん……」とパトロールは首をかしげ、男の足もとを見ながら、「で、……どちらまで？」

「だから、ぼくはこの町に帰ってきたのですよ。」と男は調子を変えずに繰返す。「もうどこにも行くつもりはありません。」

「よっぱらってるんだね？」とパトロールはきっとして、男の顔をのぞきこもうとした。男は後ずさった。一瞬ためらったが、思いきったように内ポケットから名刺をとりだしてみせた。パトロールが懐中電燈をつきつけた。その光の中にどっと雪がふきこんできた。

パトロールが大きな鼻をすすりあげた。黒ソフトがそれにつけ加えて言った。「信用して下さい。それにぼくはドイツの学位も持っています。」

「信用する、しない、の問題じゃない。」とパトロールはその名刺をためつすがめつ、唇をとがらした。「私は宿のことをうかがっているんです。なにかあったら、私の責任なんですからねエ。」

「ぼくは本当にこの町に帰ってきただけですよ。」

「ふん、黙秘権だね。」

二人は向いあったまま、しばらく黙ってつっ立っていた。男のソフトから、ボサッと雪のかたまりが落ちた。ふいに男が言った。

「その名刺を返してくれませんか。」

「なんだって？」

「最後の一枚ですし、それにいやな思い出を残したくありませんから……」

パトロールは思わず名刺を返し、すぐにまたあわてて取りもどそうとしたが、男はすでに手をひっこめてしまった後だった。パトロールはなにやらわけの分らぬことを呟いた。男が言った。

「ごめいわくはおかけしません。」

パトロールはゆっくり首を左右にふった。――まあ、勝手にしなさい……そう言って歩きはじめたが、二三歩行って急に振り向いた。いきなり男の顔に懐中電燈をつきつけて、消した。しかしべつに意があってのことではなかったらしく、そのまま黙って立去った。

男は眼をとじて、しばらくユラユラと揺れていた。するとその顔にまた微笑がもどってきた。くぼませた手のひらに息をふきこみ、両手をもみ合せ、トランクを引いてまた歩きだす。……一方、塀の中では、話しがおわって、花井が電話を切ったところである。花井は子供が急に老人になったような、腫れぼったい顔の中に、そこだけ妙に上品な小さな口をめりこませ、じっと切れた電話を見つめていた。これは彼が不機嫌なときによくする顔だ。しかしとり立てて問題にするようなことがあったわけではない。狭山の例のぐちと、要領をえない報告に、ちょっとばかり腹をたてたというだけのことである。……そこでわれわれとしては、いましばらく、やはり黒ソフトの後を追ってみることにしたいと思う。

……彼はキャラメル工場の塀の切れたところで、その塀にそって大通りをはなれ、左におれた。雪がいっそう深く、足どりもおそくなる。靴の中に水がしみこんできたらしく、一足ごとにぬれ雑巾をふみつけるような音がした。やがてつき当りに灯が見えた。すると男はぴくっと体をふるわせ、苦悩にみちた目で、その灯をかき抱くようにじっと見つめるのだ。次の瞬間彼は固く目をとじていた。それから、その灯が消えてしまうのを恐れるように、ゆっくり薄目を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook